

SARS-CoV-2 の疫学—フェイクデータに惑わされないための教訓

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）のパンデミックは、2023年5月末現在、全世界における総感染者は6億8900万人、死者は688万人を超え、日本ではのべ3380万人以上が感染し、7.5万人あまりが死亡した。

SARS-CoV-2 流行は、日本国内でも世界的にも複数の波を形成したが、それぞれの波の拡大、収束の要因は明らかでない。感染者数や死亡者数は国や地域毎に異なり、同地域でも時期毎に異なる流行パターンを示したが、地域差や流行強度の差の原因も不明である。

本講演では、大学の地域貢献活動の一環で、高梁医師会新興感染症対策委員会のアドバイザーとして助言するために行った、疫学研究と文献的考察の成果を紹介する。国内都道府県の地域間格差研究の手法により、日本の第1～7波の流行の要因が明らかになった。各波毎に程度の差はあるものの、人口密集、高齢者人口比、小児人口比、ワクチン接種が流行の拡大と収束に関わっていた。ところが、世界的には、各国における経済活動や政治体制の影響が大きく、興味深いことに、高齢者人口比やワクチン接種は、日本と全く異なる形で流行に影響していた。

本疫学解析で明らかになった、日本固有の SARS-CoV-2 流行の特徴が何から生じたかを論じ、日本における感染対策のあるべき姿について考察したい。また、疫学や文献考察から見えてきた、感染対策の迷走ぶりについても反省を込めて議論したい。